

孤絶

家族内事件

第3部「幼い犠牲」

6

父から性被害18年

児童虐待の中でも被害が表面化しにくく、心に深刻な傷を残すのが性的虐待だ。被害を打ち明けられな

い」と口止めされ、毎週のように苦しめられた。母親が家を空けるたび、恐怖におびえた。女性は「家では笑った記憶がないし、食事をしても味を感じなかった」と振り返る。

「暗闇のどん底にいるみたいだった」。27歳までの18年間、実父から性被害を受け続けた女性(44)にとって、両親と暮らした日々は思まわしい過去だ。

小学5年生の時、耐えきれず、母親に被害を打ち明けた。だが、母親は、父親の「もうしない」という言葉を信じ、「なかったこと」にした。その後も被害は続いたが、母親は「見ないふり」を続けた。

初めて被害に遭ったのは9歳の時。学校から帰って昼寝していた時、下半身を触られた。以降、父親は、家族のいない時間に忍び寄ってきた。従わないと髪の毛をつかんで引きずり回され、顔を何発も殴られた。

「誰にも言わない。話したらお前も家族も死ぬしかな



実家を離れた後、手にするようになった聖書を読み返す女性。今でもつらくなるページをめぐる。(今年6月) 奥西義和撮影

支援団体知りSOS

20歳代前半の頃、勤務先で、父親から性的虐待を受けたという被害者の話が載った週刊誌の記事を見つけ、「私と同じだ」と思った。4年間悩んだ末、記事にあった支援団体に「助けて下さい」と手紙を書くと、すぐに電話が来た。

「家を出なさい。あなたのお父さんは犯罪者だよ」。初対面でそう言ってくれたのは、自身も性的虐待の被害者で虐待被害者の支援事業を行う一般社団法人「WANA関西」(大阪市)代表理事の藤木美奈子さん(58)。被害を受け止め、「おかしい」と言ってくれた人

は初めてだった。1か月後、黙って家を飛び出した。その後、藤木さんのもとに身を寄せ、住まいや仕事をもらった。その少し前、ずっと寄り添い続けてくれた恋人もできた。被害に慣れ、「本当に大変だったね」と長い苦しみを受け止めてくれた恋人と、女性は35歳で結婚。今は2人の子に恵まれ、はしゃいだ笑顔や静かな寝顔に幸せを感じる。

それでも、時折、父親に襲われる夢を見る。父親も「助けてくれる大人が必ずいる。勇気を出して逃げて、助けを求めてほしい」と。性被害の相談は、治療なども一元的に担う全国の「ワンストップ支援センター」などで受け付けており、内閣府のホームページに連絡先が掲載されている(http://www.gender.go.jp/policy/no_violence/avjk/pdf/one-stop.pdf)。意見や感想を社会面に情報を「の連絡先へお寄せください」

支配欲ゆがんだ動機

性的虐待被害者の心のケアを行っている西沢哲・山梨県立大教授(臨床心理学)は、「親らによる性的虐待の目的は、性的欲求を満たすことと考えられがちだが、実際は相手を支配したいと

いう欲求が動機になっていることが多いと分析する。中学生の養女への強姦罪などで2年前に実刑判決を受けた40歳代男性は6月、近畿地方の刑務所で取材に応じ、「反抗する娘を許せ

スイス発祥の「テクノス」
クロノグラフ

税込 12,960円

お問い合わせは
0120-76-3777 (受付時間 午前9時～午後5時)
インターネットで <http://yom.ocn.jp>

大手町モール 8339 検索

社会面に情報を

〒100-8055 読売新聞社会部
FAX 03-3217-8363 shakai@yomiuri.com

写真はこちらへ dokusyap@yomiuri.com